

「でんきと私」

電気科2年 吉屋 桜喜

「ああ腰が痛い。」父がそう言い仕事から帰ってきた。僕の父は電気工事士として働いている。その日は仕事で重いケーブルを運んだらしい。それにより腰を痛めてしまったみたいだ。

僕たちは日々、「電気」と一緒に生活している。明るくするにも電気がいるし暖を取るにも電気がいる。この原稿を書くのに使っているタブレットでさえ電気がないと使うことが出来ない。今となっては電気がないことは考えられない程当たり前で欠かせないものだ。

しかし、当たりの裏には多くの人の苦勞が隠れていることを父とのやり取りにより知った。そんな当たりの電気がもしなくなったらどうなるのだろうか。そう考え僕はインターネットで調べてみた。すると、去年の元旦に起こった能登半島地震が出てきた。能登半島では、送電線や変電所の損傷による停電ではなかった。そのため、広範囲に被害はなかったみたいだが、それでも4万戸を上回る被害があったらしい。それだけ多くの人が冷蔵庫を使えず食品を保存できなかつたり、真冬にもかかわらず暖房が使えなかつたりそんな日々が一月も続いたそう。

もしかしたら、僕が当たり前と思っている「電気」というものは当たり前ではなかったのかもしれない。たくさんの人の苦勞のもとに成り立っており、災害一つで使えなくなってしまう。この原稿を機にそれを知ることが出来た。

そこで、僕に出来ること。それは電気を大切にすることだと思う。電気は限られた資源であり沢山の人の力によって成り立っている。

これから電気はより高くなり今のように使えなくなっていくらしい。なのに、僕は今湯水のように電気を使ってしまっている。そんなことをしてしまっているのは絶対にいけない。

これからは、少しでも節電をして電気を大切にしていきたい。